

エネルギー政策を考える

南部博彦

1. Biography

昭和 10 年 3 月石川県金沢市で軍人の長男として生まれる
 昭和 34 年学習院大学理学部化学科卒 有機化学専攻
 昭和 38 年三井石油化学に入社 総合研究所に配属 モノマー開発研究に従事
 現 NPO 法人岩国パソコンの会理事 約 15 年地域に密着した IT 普及活動に従事

2. 原発事故の反省

☆福島原発事故で知らされたこと

「作られた安全神話」「54基の原発の存在」「多量の使用済み核燃料の存在」
 —技術者として、何が問題なのか掘り下げざるを得なかった—

☆4篇の事故調査報告書が出版されている

民間事故調、東電事故調、国会事故調、政府事故調

”4つの「原発事故調」を比較・検証する”も出版されている

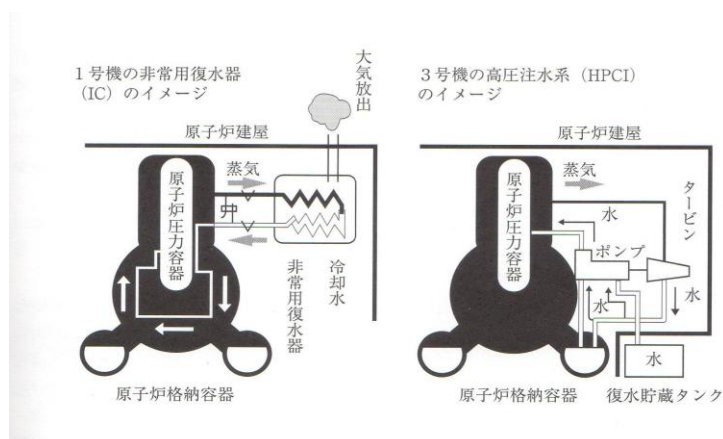
☆事故原因の推定(主として技術面から)

<原因1> 史実・専門家の意見の無視

- ・堆積物に記録された貞観津波(869)、慶長津波(1611)の痕跡
 - ・福島沖に地震空白域が存在、大地震の可能性大(地震学者)
 - ・東電自ら10mを越す津波の襲来を推定(内部資料)
- これらに対する安全対策が全く取られていなかった—

<原因2> 緊急時の安全対策の欠如

- ・非常電源がない、緊急冷却システムが正常に作動しない
- ・ベント操作の操作指針がない(作動の遅れ)



- <原因3> プラント管理体制・組織、運転要員の教育、
- ・技術の伝承(三井化学の事故)
 - ・本社・政府の関与、意思決定の遅れ

3. 核燃料サイクルの欺瞞

☆高速増殖炉もんじゅとは

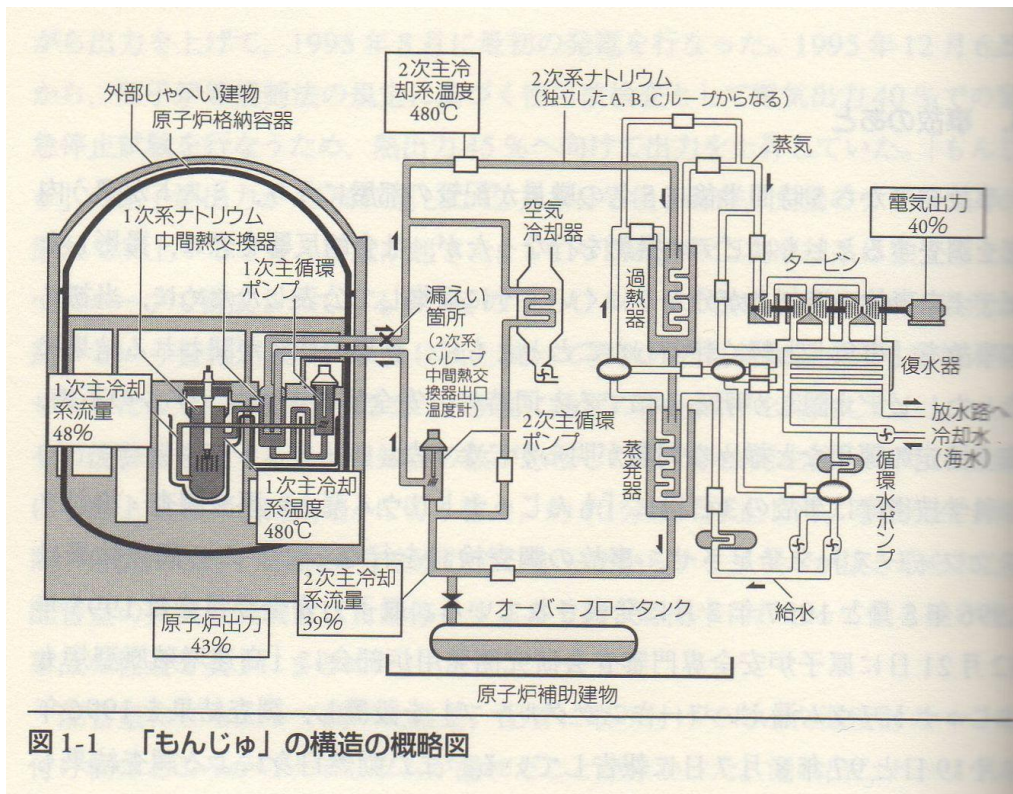
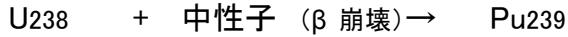
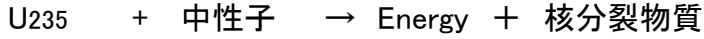


図 1-1 「もんじゅ」の構造の概略図

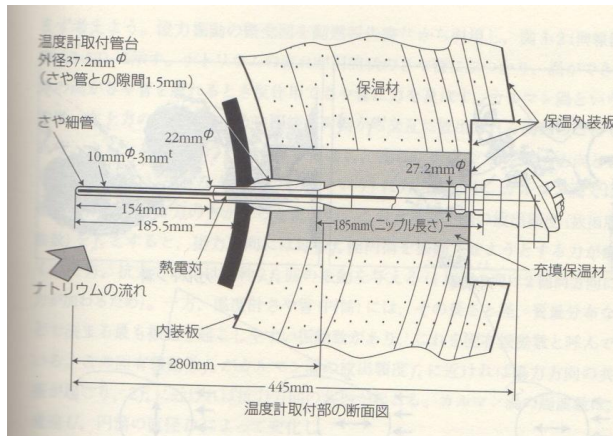
☆ ナトリウム漏れ事故

- ・1995.12.8 発生 ナトリウム流出量 700kg
- ・漏洩箇所 温度計のさや (次図参照)

<問題点1> 誰がさやを設計したか、誰が検査し承認したか、
高温のナトリウム存在下のさやの挙動の解析は？
—プラント技術者の目からみるとあまりにも杜撰—

<問題点2> ナトリウムを熱媒体に使用
—化学屋と物理屋の違いを感じる—

—原爆の原料となる Pu239 の生産に繋がる—



—技術未完のもんじゅは即刻廃炉にすべきである—

4. 真の安全対策とは？ 今後どうすべきか？

人類は原子力というパンドラの箱を開け、核廃棄物という負の遺産を背負ってしまった。政府は廃棄物処理という問題を放置したまま、再稼働、新設に突き進もうとしている。まさに展望のない暴挙と言わざるをえない。

- ・津波の大きさに合わせた防潮堤の建設(即物主義)
- ・原子力規制委員会の安全審査に依存(責任の転嫁)
- ・科学的調査結果の無視(活断層の調査と評価)

— 廃炉技術の開発と推進、核廃棄物の処理が避けて通れない課題—

5. 企業体質の変遷

☆ 企業は誰のために存在するのか

- ・社会・社員のため → 企業・株主のため (企業業績の確保)
- ・人をモノとみなす風潮の蔓延(規制緩和が非正規労働者を生む)
- その結果として企業体力の減退を招いてはいないか！—

☆ 企業倫理の欠如

- ・金儲け主義、事勿れ主義、将来への展望のない近視眼的経営
- ・次世代に負の遺産(多量の核廃棄物)

、一人が富の源泉であることを再認識すべきではないか—

6. 新エネルギーの開発

＜課題＞ 電力自由化のため発送電の分離は欠かせない
自然エネルギーの利用を積極的に進める
廃炉技術の開発、核廃棄物の処理に注力する

＜提案＞ 小規模発電技術の開発を促進する
蓄電技術の開発を強力に推進する
自己完結型の風力・太陽光発電の開発を図る

原発の再稼働のためには、1兆円を越す安全対策費が必要と見積もられている。
それだけの資金を投ずるなら、自然エネルギーの開発に投資すべきである。

＜原発推進派の論理＞

- ・電力不足、化石燃料高騰による電力料金の上昇（節電の実績）
- ・原発に投下した資金の回収（単純な経済論）
- ・使用済み核燃料の処理（モンゴルなど他国へ引受させる）
- ・核燃料サイクルへの幻想（安倍総理の国会答弁）

—日本人の英知・技術開発力に期待する—

7. 最後に

☆ 倫理的な視点

「マイケル サンデル教授白熱教室@東北大学」(2/22)

「除染作業で出た土は誰が引き受けるべきか？」

「自主避難を補償すべき？」

「自分の命と職務への責任どちらを優先するか」

「復興に必要なのは強いリーダーシップか、話し合いか？」

—日本人の徳性、根強い倫理観に触れ、感動した—

☆ 合意形成とは

「徹底的に議論し、相手の意見を十分に聞き、お互いに納得する」

その過程が合意形成にとって必要不可欠である

☆ 自然は冷徹

—畏敬の念をもって接する謙虚さが必要である—